

《現地報告》

サゴ林管理の粗放性について

——インドネシア南スラウェシ州のサゴ生産集落の事例から——

遅 沢 克 也*

1. はじめに ここに報告するのは、一つの小さなサゴ生産集落のサゴヤシ林の管理とサゴ生産の現状である。東南アジア島嶼部の熱帯低地を中心に広く分布するサゴヤシ (*Metroxylon sagu*) は成熟に伴ってその幹に良質のデンプンを多量に蓄積させ、一部住民の重要な食糧として利用されてきた。一方、このサゴヤシは未利用地として残存する熱帯低湿地でも成育可能なことから、次世紀の食糧資源あるいはデンプン資源作物としての生産が期待されている。サゴヤシ林の集約的管理によってサゴデンプンの潜在生産力を高め、単位面積当たりの収量を増大させる可能性などが議論されてきた〔FLACU 1977: 157-177; 1980: 110-127, 長戸・下田1979: 160-168〕。

しかし、筆者が調査したインドネシア南スラウェシ州ルウ県の海岸低地に立地する伝統的サゴ生産集落、ラップ (Labbu) 周辺のサゴヤシ林では、このようなサゴ生産の集約化は全く見られなかった。また極めて例外的な場合を除けばサゴヤシが移植されることもない。村人はサゴヤシ林内に密生する吸枝を適当に間引いて、一定の樹間を保つことがサゴヤシの成長を早め、収量を増大させることを知っているにもかかわらず、あえてこれらの管理を行わない。むしろ、サゴヤシは放置していても収穫できるという利点が強調されていた。彼らにとってサゴヤシは「ほったらかしでも安定した収量が得られるもの」であって、林内の管理を行うという発想は全く見受けられなかったのである。

なぜ、この伝統的サゴ生産集落におけるサゴヤシ栽培が集約化の方向へ進まないのかを解き明かす手がかりとして、村人の関心が異常に高まるサゴヤシの所有、相続問題に触れながら、サゴ生産の実態とその問題点を紹介したい。なお本稿はトヨタ財団の研究助成を受けて1983年12月～1985年12月、および1986年3月～1987年3月までに行われた調査にもとづいている。

*おそざわ かつや、京都大学大学院農学研究科

2. サゴ生産地域の3類型 同じサゴヤシ (*Metroxylon* spp.) からサゴデンブンの採取 (生産) を行っている地域といえどもその生産様式はさまざまであり、混乱を避けるためにこれらをいくつかの地域類型に分けることが必要と思われる。

サゴ生産地域の類型区分を試みるにあたって、サゴヤシの栽培管理やサゴ採取 (生産) 工程の技術の差異よりも、その生産物がどこまで出荷され、その利益がどのように配分されているかという経済的な側面によって分けるほうがサゴ生産社会の本質に迫りやすいし、簡便である。ここでは市場までの距離を尺度にし、①遠隔地の大きな市場へ出荷する地域、②地方市場へ出荷する地域、③村外へは出荷せずに村内で消費する地域の3区分を設定するのが適当と考えられる。①の「大きな市場」とは国際市場や国内の大都市の市場で、このような市場へ出荷している生産地としては、西マレーシア・ジョホール州、東マレーシア・サラワク州、インドネシア・リアウ州、西カリマンタン洲 (ボンティアナック) などがある。資本力のある中国系のサゴ仲買人やサゴ工場主等によって生産・出荷がプロモートされ、移植や樹間の管理も行われることが多い [TAN 1983, CHIN 1977, 高谷 1986]。②の「地方市場」とは生産地からさほど距離のはなれていないサゴ食圏内の地方市場で、生産から出荷までの主体が生産地の村人であることが多い。サゴヤシ林が粗放な栽培管理下に置かれていることが多いが、生産されたサゴの大半が出荷され、貨幣を媒介とした経済が進んでいることがこの地域の特徴となっている。かつては、こうした地域が多く存在していたと思われるが、近年、他の商品作物への転換が急で、この類型のサゴ生産地域は急速に減少しており現時点では辺境に位置する地域が残存する。調査地のラップはこうした集落の一つである。③は自給的サゴ生産地域であり、サゴヤシの自生林があるといわれているイリアン・ジャヤ、パプア・ニューギニアのサゴ生産地域である¹⁾ [TOWNSEND 1974, OHTSUKA 1983]。

3. 調査地区ラップの概要 サゴ生産集落ラップは行政的には、南スラウェシ州ルウ県マランケ郡ベンカジョアン村 (Desa Pengkajoang) の一集落である (図1参照)。

<立地> 南スラウェシ州の主要なサゴ生産地の一つであるルウ地方は同州の中では開発の遅れた、人口密度の低い (22.7人/km², 1985) 森の世界であったが、近年の移住政策によってジャワ、バリ、ロンボク (Lombok) や南スラウェシ州内の

1) 現在はサゴの出荷をしていない第3類型の自給的サゴ生産地域と考えられる地域には、その過去にサゴを交易品として扱った歴史があった地域が含まれていることを注意しておきたい。

他県からの人口流入が盛んで、ルウ平野の山沿いを走る幹線道路を中心に急速に農地が開かれている。こうした外部者にとってルウ地方はいまだに魔術の駆使される魔境として恐れられている。

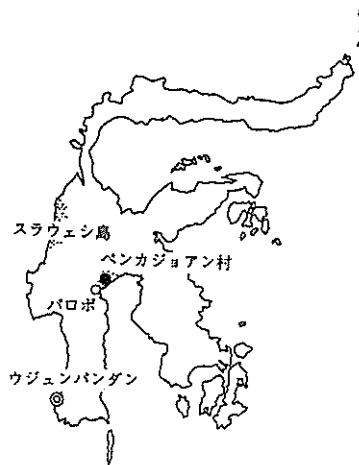


図1 調査村の位置

このルウ県内にあってマランケ郡はルウ平野を流れる二大河川、ロンコン (Rongkong) 川とバレアセ (Balease) 川に挟まれた陸の孤島となっていて未だに物資の搬出入は海上交通以外にない県内の辺境と言われている。

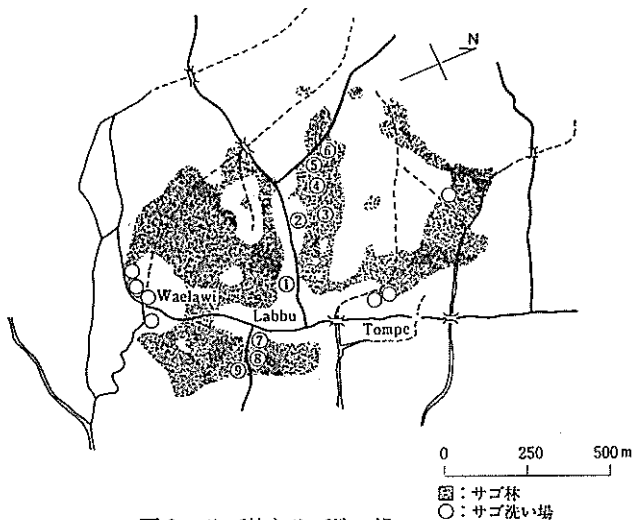


図2 サゴ林とサゴ洗い場

マランケ郡内の集落の多くはマングローブ林の後背、海岸から約4～5km内陸のかつての砂丘跡などの高みに海岸線に並行して断続して位置している。ラップもこうした集落の一つで、サゴヤシへの依存度が高い地区となっている。海岸から蛇行するトンペ(Tompe)川を遡ってマングローブ帯を抜けると、速めにココヤシが見えてくる。ラップの集落である。集落の周辺には約150haのサゴヤシ林が図2のように分布しており、サゴ生産は非戸と動力粉砕機を備えた洗い場(通称サゴ工場)で行われている。

<村人>

筆者の滞在期間の中間にあたる1985年当時、ラップには105戸、約550人が住んでいた。その50年ほど前の1935年当時、ラップには6戸しか家はなかったという。現在の住民の多くはベンカジョアン村の他の集落、ウェラウィ(Waelawi)、トンペ(Tompe)などから移り住んで来た者ないしはその子孫である。移住は婚姻を契機にする場合が多い。そして、婚姻は通常イトコ、マタイトコ間などの親族内で行われる。結婚後、新たな生活の場を求めてサゴヤシ林の周辺に移り住んだのである。また、この地は昔からルウ県内の他の海岸部の集落、特に県都パロポの南部ビロバ(Belopa)、パダンサッパ(Padangasappa)などとの交流が盛んである。血縁者も多く、両地間での婚姻、人の移動も顕著である。

村外から移住が行われる例を以下に紹介しよう。スラウェシ独立戦争²⁾が勃発してまもない1952年頃、着の身着のままの一人の男がその祖父の墓を尋ねてパロポの南、ラロンボン郡のサンパノ(Sampano)から訪れた。この祖父はOpu Dg Talesang と言い、村人の祖先の中で特に英雄視されている人物である。40人の妻をめとり、賭博の名人で、金がなくなるとトラジャ地域に出かけ人をさらって、売り飛ばした豪傑であったと言う。彼は晩年にサンパノに渡って何人目かの妻をめとった。そしてこの子孫が親族を頼って来たのである。この男はサゴ採取をはじめいろいろな仕事をしたらしいが、夜は伝承や日常の出来事を語りにして聞かせる語り部だったという。村で一番のサルン(絹の布)を持っている女性に近づき、結婚して定着した。この例のように外部からの渡来者が村を訪れ、結婚を契機に住み着く例は村の歴史の中に何例か見いだされる。

村人の使う言葉はトラジャ語の影響を受けたブギス語で、文化や慣習もブギ

2) カハール・ムザカール(Kahar Muzakkar)の反乱のことである。インドネシアが独立して間もない1950年から1965年にかけて、スラウェシはイスラム国家を建設(Darul Isram)するための一種の独立戦争に巻き込まれていく。ルウ地方は最後まで反乱軍が立てこもって抵抗したことから戦争の傷跡が強く残っている。

ス族と類似していることから大まかにはブギスの1集落と考えてよい³⁾。サゴ生産との関連で留意しておきたいことは、近年薄れて来ているとはいえ、一種の階級制度があったことである。王族、貴族、平民、奴隷の社会階層に分かれる。南スラウェシの最初の王国が成立したのはルウ地方であった。初代の王(Tamboro Langi : 最初の To Manurung : 天から降り立った者の意)は天尊降臨によって地上に降り立ち、その血は最も貴く、色は白いといわれている。この王の子孫は地上の民と結ばれ、その血は拡散しながら現在に到っているという。現在も使われているオプ(Opu)、ダエン(Dg : Daeng)などの称号はこの血の純度を示している。実際には村人の大半はなんらかのかたちで To Manurung からの血統をたどりうるとされる者達である。

もう一つのサゴ生産に関連する重要な村社会の特徴は、村人の間では活発な「競い合い」が繰り返されてきて、自らの誇示行為が好まれることである。この「競い合い」は血統のみならず、世代や資力などが同じレベルと見なされる者達の間で特に顕著であった。一歩でも他者より抜きん出たいとする「競い合い」は資力や権威が誇示される局面だけでなく、経済行為の内容にも及んでいて、労働の質に関する村人の意識と関連していると考えられた。

< 生業 >

村人はサゴ生産以外にもさまざまな経済活動を行っている。主な生業としては、森林資源の採集・出荷、養魚を含めた漁業、そして輸送業や交易などがある。表1は1985年10月の時点での戸主別に見た生業の内訳を示している。

表1 調査地区ラップの生業

生業の種類	戸数
サゴ専業	32戸
サゴと養魚	21戸
サゴと行商ないしは交易	5戸
木材の伐り出し	2戸
養魚専業	12戸
養魚と交易、材の伐り出し、大工など	4戸
輸送業と交易	9戸
雑貨店経営	1戸
職人(大工、家具職人)	8戸
その他	11戸
合計	計 105戸

3) 南スラウェシでは出身地や家系を誇り貴ぶ。村人はブギス語を話しているが、自らをルウ独自の魔力を信じ、ルウの守護神に守られるルウ人(Orang Luwu)と呼び、ブギス人一般と区別しているが、ここでは彼らをブギス人として論じることにする。

出荷される森林資源としては、湿地林からの木材、ロタン、縄材 (*bebesu* : シダの類) やマングローブ林からの薪炭材がある。村の周縁にある森からのこうした森林資源の出荷は近年枯渇化し、こうした仕事は先細りの傾向にある。

養魚は1980年代前半から導入された融資制度 (R.C.D. : Rural Credit Project など) を契機に急速に広がった。対象魚は *ikan bandeng* (サバヒイ : *Chanos chanos*) で、仲買人から購入した稚魚をマングローブ林内の汽水域に開かれた養魚池に放流し、4～5ヵ月育てた後、出荷する。また、1984年頃からはエビの養殖も併用されてきている。なお、自家消費され出荷されることはないが、干満差を利用したヤナ漁 (*ma'lele bila*) や刺し網漁 (*ma'lele puka*) もマングローブ林内に発達するクリークや河口で行われている。

輸送業とは動力付きの貨物船 (1～2トン) で村と街の間の物資の搬出入を行う仕事である。村人の多くはかつて帆船を操って森林資源をバジョエ (Bajoe)、パリマ (Pallime) 等のボネ湾岸の街に運んだ経験を持っている。70年代後半から帆船から船外機付きの貨物船に変わった。

前掲の表1の項目の中には揚げられていないが、村の経済を考える上で見落としてはならないのが、水牛の存在である。サゴヤシ林内には300頭余りの水牛が放飼されていて、新しい事業資金や結婚資金などの多額の出費のための蓄財になっている。また、水牛を対象とした「質」制度 (*ma'boro*) などもあり、水牛は村経済を円滑化させる金融制度のような役割を果たしていた。

村人の経済活動に関しては、次の2点が留意されるべきである。その1つは、村には貨幣を媒介とする商品経済が浸透していることである。こうした商品経済化は、交易を通じてかなり以前から発達していたと考えられる。サゴ生産を例にとってみても、伝統的なサゴ生産集落というと何かプリミティブな自給自足的な社会をイメージしがちであるが、ラップでは生産されたサゴの約8割以上が出荷され、得られた収入で他の生活必需品が購入されているのである。

第2点は村人の生業は固定したものではなく、頻繁に変わることである。選択される経済活動は短期間で儲るもの、投機性の高いものへと容易に転化する傾向が顕著であった。このような中において、サゴ生産は他の生業と組み合わせられ、この組み合わせの中で、サゴ生産は他の経済活動の間のつなぎであったり、新たな事業に乗り出す場合の支えとして機能していると考えられた。表1の「サゴ専業」の32戸は1985年の10月の時点でサゴ以外の経済活動を計画していなかった戸数であり、時の経過とともに他の生業に移行したり、逆に他の正業からサゴ生産にもどったりする可能性が含まれている。事実、1983年の12月か

ら1987年の5月までの調査期間中に継続してサゴ生産だけに従事していた戸主はわずか10人にも達しない数であった。村人が頻繁に生業を変える例として Anwar 氏の事例を紹介したい。

Anwar 氏は結婚後、しばらくサゴ採取で生活していたが、ワニの皮が高く売れることを聞きつけ、仲間数名とワニ猟の旅に出かける。この旅は東南トラウエシから北スラウエシにおよび、約1年後、村へ帰る。この時の儲けの一部で刺し網を買い、漁業とサゴ採取に従事する。娘が中学校に上がる時、その学資をつくるためにこの刺し網を手放した後、南パロボの親戚の者といっしょに水牛の交易を行うようになるが、2年余りで中止する。街の仲買人に買ったかれて、儲けが少なかったからだと言う。現在はサゴ生産をしながら次は何をやるか考慮中である。

この例から、こだわりなく生業を変えている様子が窺える。こういった一種の積極性を裏から支えているのがサゴであると言える。いつでも生活してゆくうえでの食糧と現金取入を保障するサゴヤシ林があることが、容易に、そして積極的に、新しい事業に乗り出す支えとなっていたと考えられる。

<村の変容> 生業が容易に変化することを述べてきたが、今、村は、これまでとは異なった変容を迫られているように思われる。

それは行政当局の統制が強まりつつあることに関連する。辺境に位置するラップはスラウエシ独立戦争が治まった後も政治的な意味からも中央から遠く、神秘的な力を保持する村の伝統的権威者の傘下に統制がとれていた。例えば、近在の村からその親から結婚を反対された男女が逃げ込んでくることがあった。こうした場合、村の権威者は、親の依頼を受けた警察がこの男女を捜しに来たとしても、両者が命がけで出た行為を尊重し、二人を彼の権威のもとに結婚させた後、両親に引き渡している。

こうした村にも、最近、税制と土地の登記の問題に見られるように行政当局の統制は急速に強まってきている。1986年の1月に税制の大改革が行われた。オランダ統治時代から引き継がれ複雑化していた税制を、P.B.B. (Pajak Bumi Bangunan) に一本化して徴税が強化されたのである。この過程で所有が曖昧であった土地の登記化の動きがみられた。所有の曖昧な土地の占有を主張する者や自分の土地の占有を確固たるものにしようとする者が税金という代償を払ってまでも土地の登記を行う場合があった。

サゴヤシ林内の土地把握はサゴヤシ株を中心にしてその周囲の土地の占有が認められるという曖昧なものになっている。特に所有者の異なる株間の土地の

所有が曖昧で、両者の占有意識が拮抗し、紛争の起こりやすい「場」となっていた。元来この種の紛争は村の伝統的権威者によって仲裁されていたが、土地の権利書 (*sertifikat tanah*) がいったん発行されてしまえば、村の権力者といえども介入できない事態になっているのである。こうした変化を村人は敏感に感じ取っている。その結果、サゴヤシ株を中心とした粗放な土地把握から国家によって保障された平面的な土地所有への変化が見られつつある。最近、サゴヤシ林内でカカオ園が開かれつつあるのはこうした影響と考えられる。

4. サゴ生産の現状 ラップ地区の集落の周囲には約150haのサゴ林が分布し、旧河川跡に沿って立地する9つのサゴ洗い場(図2中の①～⑨)でサゴ生産が行われている。この洗い場には1970年代末から導入されたサゴ髓の動力粉碎機と深さ1.5mほどの浅井戸があり、その脇にはサゴデンプンの沈澱槽として中古の丸木舟が2～3備え付けられている。

ここでサゴ生産は通常2人(搬出担当者とサゴ洗い担当者)が1組となる。サゴヤシ成熟木の選定をした後、搬出担当者が伐採し、1日分の作業量だけの幹の樹皮をはぎ取り、1回60～70kgのサゴ髓の丸太を天秤を用いて駆け足で洗い場まで運ぶ。この作業は1日6～10回繰り返される。洗い場に運び込まれたサゴ髓は粉碎機の持ち主によってオガクズ状のものに処理された後、洗い担当者によって舟の上に備え付けた *semaka* (サゴの葉柄で作られた穂)に移され、ニッパヤシの葉でつくったバケツ(容量5～7リットル)で汲み上げた井戸水をかけながら洗われる。この汲み上げ作業は1日平均900回以上にもなる重労働となっていた。

これら一連の作業は2～3本のサゴヤシを処理して、沈澱槽として用いられている舟が一杯になるまで続けられる(平均約16日間)。その後、沈澱したサゴは水分を調節するために2～3日放置して、ぬれサゴのままニッパの葉で編んだ俵 (*tunan*; 5～6kg)につめられ、パロポに出荷される。生産されたサゴは洗い場の施設(井戸、舟、*semaka*)の持ち主、粉碎機の持ち主、サゴヤシの持ち主、搬出担当者、洗い担当者間で配分され、その配分率はそれぞれ10%、18%、18%、27%となっている。

サゴ生産に係わるサゴヤシの所有者、搬出担当者、洗い担当者、洗い場の施設の持ち主、粉碎機の所有者は、当然のことながら、さまざまな組み合わせで重複する。例えば①搬出とサゴ洗いを1人で行う、②サゴヤシ所有者が自分の粉碎機を使ってサゴ洗いだけを行う、あるいは③サゴ洗い担当者が洗い場の施設

のうち井戸と *semaka* を所持している場合などの組み合わせが生じる。こうした場合はそれぞれの配分量が加算される。すなわち、①の場合は $27\% + 27\% = 54\%$ 、②は $18\% + 18\% + 27\% = 63\%$ 、③は $5\% + 27\% = 32\%$ の配分になる。またサゴヤシ所有者とサゴ生産者が異なる場合、伐採に先だって、収穫されるサゴの量をあらかじめ見積り、所有者への配分量に相当する現金が前払いされることが多い。

彼らが利用するサゴヤシ林の状態について簡単に触れておこう。村人は移植や発生する吸枝の整理、樹間の管理などの栽培管理を全く行っていない。そのためサゴヤシ林内ではサゴヤシ株の密度や樹間に大きな変異が見られた。サゴヤシの幹がすでに立ち上がったサゴヤシ立木の密度は62~140本/haの間を変異している。この値はサゴ生産地域の第1類型に属する西マレーシアのジョホール州のサゴヤシ林の平均立木密度296本/ha (150本~425本/ha) [京大サゴヤシ研究クラブ1982:196~203, WATANABE 1986:71~72]を大きく下回っている。

サゴヤシ自体の形態も非常に変異に富んでおり、村人によって収穫されたサゴヤシ成熟木⁴⁾だけに限ってみても、幹長は1.5m~15.7m (平均8.36m)、平均直径は21cm~74cm (平均48.8cm)の間を変異している [遅沢・田中 1988]。

次にサゴヤシの収量と労働生産性についても簡単に触れておきたい。従来サゴヤシの収量に関してはさまざまな地域からの報告があるが、調査方法やサンプル数に問題があってやや混乱している。調査期間中に村人が処理した102本のサゴヤシ成熟木の収量は、変異が大きいものの、平均すると乾燥デンプン換算⁵⁾で223kg (100~417kg)という大変高い収量となっていることが確かめられている [OSOZAWA 1986:53~54]。

一方、収量の大きさとともに労働生産性の高いことも指摘されている [OH-SURA 1977:100, TOWNSEND 前掲:226~228]。村のサゴ生産に費やされる労働時間 (サゴ林までの移動時間を含む) を追跡した結果、乾燥サゴデンプン換算で8~11kg/人・時間の見返りがあることが分かった⁶⁾。これを村内の取引

4) 1986~1988年の調査期間中に村人によって伐採されたサゴヤシ成熟木のうち157本について形態調査を行った。平均直径とは下端から2m、中央、上端から2mの直径の平均を意味する。幹長とは伐採された幹の最下部から上端までの長さである。

5) 2日ほど毎日乾燥を行った乾燥サゴデンプン。水分を12~14%含む。

6) 全生産量からサゴヤシ所有者、粉砕機の所有者などへの配分量を除いて、実際に各生産担当者が得た収量を費やされた労働時間で割った。1986年の11月末から約3ヵ月間に行われた、延べ10回のサゴ生産に費やされた労働時間のデータに基づく。

価格に換算すると、1人1時間当たり1,000ルピア前後の収益が得られていることになる。この値は収益性が高いと村人に受け止められている養魚の労働時間当たりの収益性に匹敵することが確かめられた。

一つの目安としてこの値をジャワの水田耕作とも比較しておきたい。中部ジャワのクラテン(Klaten)における水田耕作(高収量品種を使用)では平均0.8~1.2kg(精米)/人・時間の労働生産性があったことが報告されている[Sauvageo 1974]。この値をサゴの労働生産性と比較するために、1986年当時のラップの精米価格;250~350ルピア/kgで換算すると、このクラテンの水田耕作の労働生産性は240~360ルピア/人・時間に相当することが分かる。サゴ生産の労働生産性はジャワの水田耕作のそれを大きく上回っているのである。

5. サゴヤシ 栽培の集約化を阻む要因
 サゴヤシが高い収量をもたらし、かつその労働生産性も非常に高いという事実にも関わらず、なぜ、この村がサゴ栽培の「集約化」へ向かわないかを以下の項目にわたって考えてみたい。

サゴヤシ自体の植物学的特徴に起因する問題である。まず、サゴヤシの成育期間に関する問題がある。通常、サゴヤシは移植してから伐採されるまでの時間がかかりすぎることが指摘されている。この村の場合、放置状態から自然発生するサゴヤシの吸枝が成長して、デンプン蓄積が最大となる伐採適期までにかかる時間は、その環境によって大きな変異があるが、約8年から10年といわれている。このようにサゴヤシの成育期間が長期にわたることが、目前の出費に追われがちな村人の関心を集めにくいと考えられる。また、村では子供が生まれた際にその子の将来に備えてサゴヤシを植えるような先を見越したような労働力の投入は慣習的に行われていない。こうしたことが、サゴヤシの移植、株の管理などの集約的栽培に向かわない一つの要因になっている。

次に考えられることは、サゴヤシが非常に大きな有用植物であり、利用される部分も他の作物と比較して圧倒的に大きいことである。伐採され、処理されるサゴヤシ成熟木の幹の容積は0.8~1.5 m^3 にもなる。これを利用する側は、従って、伐採後の作業に単純な労力をつぎ込みさえすれば大量のサゴデンプンを得ることになる。ここでの作業は、搬出にしても、サゴ髓の粉碎にしても、サゴ洗いにしてもさほど技術のいらぬ労力の繰り返しで、誰でも容易に従事できる作業内容となっている。このことが、後述するような労働の質に対する村人の意識とも関わっている。

サゴヤシの大きさとも関連するが、1本の収量が大きいことも挙げられよう。

サゴヤシの収量が乾燥デンプンで1本当たり平均200kg前後になることは前述した。これは出荷されているぬれサゴの状態では実に400kg前後になる。このような大きな収量がある場合、この収量をさらに増加させようとする試みが生まれにくいと考えられる。また、この収量の大きさはサゴ生産を他の生業との組み合わせの中でつなぎとして位置づけている者にとって利点があるといえよう。

さらにサゴヤシ林全体に目を向ければ、様々な生育ステージの立木が混在していることに気が付く。このことは、林全体を均せば、伐採適期に達したサゴヤシが継続して供給されることを意味している。村人にとってもサゴ林は簡便で安定した収入源をいつでも提供してくれるものとして受けとめられている。この様々な生育ステージの混在が、成熟したサゴヤシが伐採適期以降も蓄積したデンプンを相当の期間維持している⁷⁾こととあまって、伐採に着手する時期を柔軟性に富んだものとしている。そして、その柔軟性のゆえに、他の生業と兼業するサゴ生産者の間ではサゴ以外の生業を優先する傾向がみられた。

＜生産物の分配システム＞ サゴ生産のシステムに関わってくる問題である。サゴヤシが伐採されてから出荷されるまでには、サゴヤシの所有者、搬出担当者、粉碎機の持ち主、洗いの施設の持ち主、洗い担当者が関わっている。これらの関係者は同一人物によって兼ねられることがあるが、往々にして異なる。そして、生産されたサゴがそれぞれの配分率によって関係者に配分されていることは前述した。

このことはサゴ生産が行われる場合、その利益が村全体に行き渡るという社会保障的な効果がある反面、伐採・搬出やサゴ洗いに直接携わる者の利益が希薄化され、村の内部からは企業家精神を持った者が輩出しにくい状態を生み出している。このように、サゴ生産者とサゴヤシ所有者の異なることがサゴ栽培の集約化を阻む大きな要因となっていると考えられた。

また、この問題は村でサゴ生産を企業化してゆく場合、生産物のコストが高くつくというマイナス要因となっている。

＜再生産への投資の蓄積＞ 再生産への投資の蓄積があるか否かは集約化への過程を探る上で重要な判断基準になるが、サゴ生産においては、こうした動きは見られなかった。動力粉碎機が導入された時も、サゴ生産による利潤蓄積からではなく、水牛などの財産を処分して購入資金を工面している。

もっとも、このことは村人の経済活動に占めるサゴ生産の位置付けからすれ

7) サゴヤシは成熟するにしたがって幹にデンプンが蓄積される。その後、花序が出現し、開花、結実する過程で蓄積されたデンプンが減るが、伐採適期に達したサゴヤシが花序を発現させるまでには、通常、1年以上かかる。

ば当然のことと言えよう。サゴ生産が他の生業との組み合わせの中でつなぎとして、あるいは新しい事業の支えとして機能していることは繰り返して述べてきた。つまり、サゴ生産からの収入は日々の生活費に使われるべく村人の家計の中で位置づけられている訳である。例えば、1 haの規模の養魚池を造成する場合、資本力の差によって異なるが、造成に着手してから最初の出荷が期待できるまでには、集中して取り組んだとしても、ゆうに1～2年以上の時間がかかる。通常は、何人かの助っ人が金で集められ、川に面した土手が築かれた後は1人ないし親族内の他の助けだけで周囲の土手の完成、抜根、池の内部の掘り下げ等の作業が進められる。この間、生活費がなくなるとサゴ生産を短期間行い、また、作業を続行する。このパターンが何度となく繰り返される訳である。また、最初の養魚池の収穫があったとしても安定した漁獲をあげるに到るまでには今しばらくの期間が必要であり、漁獲が少ない場合はサゴ生産からの収入が当てられている。こうした中ではサゴ生産の収入は消費されるだけに回されるのである。

次にサゴ生産の収入の入り方に関わる問題があげられる。サゴ生産の収入が他の生業と比較して短い期間ごとに少額ずつ入ってくることである。平均的な例として200株 (*toman*) のぬれサゴが出荷される場合、サゴヤシ所有者、搬出担当者、洗い担当者、その他がすべて異なっているとすれば、サゴの搬出担当者ないしは洗い担当者は約13,000ルピア程度の収入を得るであろう。そして、この収入は10日から2週間前後の比較的短期間に得られているのである。こうした形で入る収入は村の家計の中では、日常の出費に向けられる傾向が強く、再生産への投資の蓄積に回されていない。最近流行している養魚池経営では成功すれば4～5ヵ月間にまとめて何十万から何百万ルピア程度の高額収入が得られる。こうした場合は新たな養魚地を購入するなどの投資の蓄積が見られた。

<村人の意識>

サゴ生産に対する村人の意識に関係する問題である。村には、「サゴで働くことは失敗者」と見なされる風潮がある。当面はサゴ生産に従事している者も、潜在的にはサゴから離れたいとす傾向が強く見受けられる。村ではサゴ生産は伐採されたサゴヤシ成熟木の搬出とサゴ洗いという労力を提供し収入を得るものと受け取られている。そして、その作業は誰でもできる単純な重労働の繰り返しで、村社会で活発に繰り返り広げられる競い合いの中で求められる勇気、賢さ、技術等を必要としない行為として受けとめられている。この事がサゴ生産にまつわるプアーなイメージを与えていると考えられた。実際に、恒常的にサゴ生産に従事している者はどちらかという、その出生が村の社会階級の中で

は低い階層に属する者達であり、Opu. Dg といった称号を持った者は、サゴ生産に関わっている場合でもサゴ工場の持ち主を兼ねていたり、兼業する他の生業により多くの関心を払っていた。こうした風潮もまた、サゴ生産から得られた収入が再生産の蓄積に振り向けられない背景となっていると考えられた。まれに、勤勉なサゴ生産者が資金的な余剰を生み出した場合があっても、新しい家を建てる資金に回されたりして、再生産のための蓄積には向けられていない。

＜サゴ株所有、財産分与、相続＞ サゴヤシは成長するにつれて、次々と吸枝がその基部から発生し、いくつかの異なった生育ステージが混在するサゴ株を形成する。サゴヤシの所有はこの株が基本的な単位となっている。

サゴ株の所有は株の周開（ほぼ株内のサゴヤシの樹影が覆う範囲）の土地を伴っている。サゴヤシ林内には、所有者の異なる株と株の間に2～3アールの空地が生じていることがよくあるが、ここは両者の土地の占有意識が拮抗し、うかつに利用できない空間となっている。こういったサゴヤシ株周辺の土地占有意識がサゴヤシの移植をしにくい状況を生み出している⁸⁾。

このような土地を伴ったサゴ株は相続の対象となっている。均等相続が原則となっているこの村では、何よりもサゴ株は過不足なく子供達に財産分与する対象として便利である。持ち分のサゴ株が子供達の数で割り切れない場合は、不足分のサゴ株が買足された後、均等に配分されている。財産分与以外にもサゴ株の売買が行われていて、サゴヤシ林内のサゴ株所有は錯綜している。

このようなサゴ株の所有や相続に関して、生産上の問題となるのは、まず、サゴ株が一般的には労働をもはや担当していない旧世代によって所有されていることである。通常、財産分与は親が死ぬ間際まで行われない。このため現在の働き盛りの世代がサゴ株に自由に出しにくい状況が生じている。またサゴ株を所有している旧世代の者が他者のサゴ生産によって得た収入は、まだ独立していない子供の学費などに回されるため、サゴの再生産へとそれが投資されることは全くといってよいほどない。

8) 例外的にサゴヤシが移植されている場合を調査してゆくと、移植がサゴ採取よりも、土地の占有を目的として行われていることが明らかになってきた。特に村内に頼れる親族関係者がいない外部者が村の権威者の承諾の下にサゴ林の外縁部の土地所有が不明確な所に植えている例や、この地方に移り住むようになった王族が奴隷を用いて移植したと考えられる例が多い。いま村でサゴヤシの移植がほとんど行われていないのは、サゴヤシの移植によって占有権を主張できるような所有の不鮮明な土地がなくなってきていることもひとつの理由であろう。

第二の問題として、均等相続の結果、サゴ株の所有が細分化される傾向にあることがあげられる。村人の祖先のなかでもサゴヤシを多く持っていた Opu Dg Pawenari の家系の例を見てみたい。Opu Dg Pawenari（女性）は現世代から3世代前の祖先で、300以上のサゴ株を所有していたが、三世代を経た現世代に到るまでに、その子孫達によって7～8株から20株程度の規模に細分化されていることが分かった。こうした細分化の結果、持ち分のサゴヤシだけの生産だけでは生計を維持しにくい事態にいたっている。

第三は村外所有者の問題である。村外に移転した者はサゴヤシの使用権を親族に託しているが、所有権自体は、継続して保持していることが多い。このことも村人のサゴ林の管理への関心をそぐ一因となっていると考えられた。

以上、サゴヤシ林が極めて粗放な管理下に置かれている背景を簡単に述べてきた。サゴヤシのもつ成育期間の長さ、形の大きさ1本当りのデンプン蓄積量の多さといった特徴やサゴヤシ林内の様々な成育ステージの混在は、村人に高収量、高い労働生産性、作業開始時期の柔軟性、収量の安定性等を保障するものであった。しかし、その反面で、こうしたサゴヤシ自体の特徴が村のサゴ生産の現状を温存する要因となっていた。さらに、サゴを採取する村人の意識、慣習、経済システムといった要因もサゴ生産を集約化の方向へは向かわせず、むしろその労働の粗放性が尊重されるような状態を生み出していると考えられた。村のサゴヤシ林が無管理状態に置かれているのは、こうしたさまざまな要因の結果である。

6. サゴ生産 以上、サゴ生産集落の概要、サゴ生産の実態、集約化を阻む要因について述べたが、この小稿を終えるに当たって、今後このサゴ生産集落がどうなっていくのかを展望しておきたい。

サゴヤシ林が村人に生業のつなぎとしての安定した収入源を保障することはあっても、サゴ生産が収入の中心となってゆくことは現状においてもまた将来においても不可能であろう。サゴヤシ株所有の細分化の問題とともに、増加し続ける村人口のすべてを吸収するほどの規模の確保はもはやできないからである。

最近の養魚やカカオないしは柑橘類栽培への移行は村の今後の方向として一つの可能性を提示しているかもしれない。これらの試みはサゴ生産が内包する諸問題とは無縁の新しい試みである。彼らが養魚の先進地であるピンランやカカオ栽培の先進地である東部ジャワの後塵を今は拝するとしても、今後着実に

技術を見につける努力を続けていけば成功する可能性はないとは言えまい。新しい商品作物ないしは養魚の導入とその集約化への移行である。おそらく、この過程でサゴヤシ林の多くはカカオ園やオレンジ園に変わることであろう。こうした移行が実現した場合に村に与えるマイナス要因としては、村の金融として大変重要な位置を占めていた水牛放飼が困難になること、財産相続上の慣習が維持されにくくなることが予想される。実際に養魚池の相続をめぐる家族紛争が多く生起してきている。

しかし、彼らの性向を考えると、こうした道のりは大変なものになるであろうというのが筆者の率直な感想である。確かに養魚、特にエビの養殖はルウ海岸部の立地環境からいって、最も期待されるものであるが、長期的な価格見通しが不安視されており、これら新たな試みも徒労に終わる可能性もないとはいえないのである。

それならば、在来のサゴを再考することはできないであろうか？村内部からのサゴ栽培への集約化と生産の向上は前述した通り、現状では難しいが、ここに外部からのインパクトがある場合には一つの可能性が考えられる。

先にあげたサゴ生産地帯の第2類型に属するサゴ集落が、中国系の資本力のある仲買人などによって国際市場に参入し、第1類型へ移行して行く可能性は短期間ならば想定しうる。村でサゴ離れが起こった場合、一時的なサゴヤシの買付けが可能となるからである。しかし、そうした方向は村社会の混乱と崩壊を招きかねない大変危険な選択であろう。そうした実例は東マレーシア、サラワク州のメラナウ族の社会に見られる〔MORRIS 1977〕。

筆者は公的機関による外的インパクトを期待している。「集約化を阻む要因」でみてきたようにサゴ生産にまつわる所有の細分化、資本蓄積、労働の質などの問題はサゴヤシを利用する側の社会の問題であると言える。サゴヤシ自体は高いデンプン収量と労働生産性を保障しているのである。また熱帯低湿地という環境下で生態的に安定した植物であることにも着目したい。国際市場の流行に流されるのではなく、長期的な視野に立って、在来のこうした有用植物の利点を素直に評価する時期にさしかかっているのではないかと考える。

サゴヤシ園造成費を対象とした農民金融、価格変動を保障する買付け制度、サゴデンプンの品質管理と品質向上のための指導、遠隔地へ出荷する場合の輸送や保険をバックアップする制度等が期待される。長期的には国際市場への参入を目論むとしても、当面は公的機関の理解と援助によって、絶対的なサゴヤシ林面積を増やしながら、養魚や畜産（水牛）と組み合わされたサゴ生産の集約

化の方向を押し進めることが、第2類型に属する地域の今後の発展方向ではないかと考えている。

謝 辞

本調査は、「伝統的サゴ生産集落における経済力向上の試み——小規模援助の適応例——」をテーマにトヨタ財団の研究助成を得て1983年12月から1987年5月にかけて行われた。本稿では触れていないがトヨタ財団の資金援助で建設されたサゴ実験工場は村人の手によって採集が開始され、新しいサゴ生産集落の一つの方向を提示しつつある。このような貴重な機会をあたえてくださったトヨタ財団に感謝の意を表する。

参 考 文 献

CHIN, W. A.

- 1977 Economics of Sago-Starch Production in Sarawak. In Tan Koonlin (ed.) *Sago-76: Papers of the First International Sago Symposium*, pp. 107-208.

FLACH, M.

- 1977 Yield Potential of the Sagopalm and its Realisation. In Tan Koonlin (ed.) *Sago-76: Papers of the First International Sago Symposium*, pp. 157-177.
- 1980 Sago Palms from Equatorial Swamps; a Comparative Source of Tropical Starch. In Stanton, W. R. and M. Flach (eds.) *Sago. The Equatorial Swamp as a Natural Resource: Papers of the Second International Sago Symposium*, pp. 110-127.

京都大学サゴヤシ研究クラブ

- 1982 「西マレーシア・バトゥパハトのサゴヤシ」『サゴヤシ現地調査報告書』pp. 196-203。

MORRIS, H. S.

- 1977 Melanau Sago: 1820-1975. In Tan Koonlin (ed.) *Sago-76: Papers of the First International Sago Symposium*, pp. 121-142.

長戸 公・下田 博之

- 1979 「サゴヤシの生産の現状とその将来性」『熱帯農業』23(3): 160-168。

OHTSUKA, RYUTARO

- 1977 The Sago Eater's Adaptation in the Oriomo Plateau, Papua New Guinea. In Tan Koonlin (ed.) *Sago-76: Papers of the First International Sago Symposium*, pp. 97-104.

- 1983 *Oriomo Papuans: Ecology of Sago-Eaters in Lowland Papua*. University of Tokyo Press, Tokyo.

OSOZAWA, KATSUYA

- 1986 Sago Production in Kabupaten Luwu, South Sulawesi: a Trial for Upgrading the Economic Capability on a Traditional Sago-Producing Society. In Tanaka, K. et al. (eds) *Environment, Landuse and Society in Wallacea*, pp. 51-69. CSEAS, Kyoto Univ.

遅沢 克也・田中 耕司

- 1988 「インドネシア、南スラウェシ州における一村落のサゴヤシ生産（第一報）収穫時におけるサゴヤシの二、三の形質」『日本作物学会紀事』57（別号2）：265-266。

SAJOGYO

- 1974 *Modernization without Development in Rural Java (Mimeographed Paper Contributed to the Study on Changes in Agrarian Structures, Organized by the Food and Agriculture Organization, Bogor)*.

高谷 好一

- 1986 「熱帯多雨林沿岸部の生活」『東南アジア研究』24(3)：263-288.

TAN, KOONLIN

- 1983 *The Swamp-Sago Industry in West Malaysia*. Singapore: Institute of South-east Asian Studies.

TOWNSEND, P. K.

- 1974 Sago Production in a New Guinea Economy. *Human Ecology*, 2 (3): 217-236.

WATANABE, H.

- 1986 A View on Density Management of Sago Palm in Batu Pahat, Malaysia. In Yamada, N. and K. Kairnuma (eds.) *Sago-85: Papers of the Third International Sago Symposium*, pp. 71-74.